

# えがお 愛顔を被災地へ届けたい

# ヤンボラ新聞

ヤングボランティアセンター  
No.5  
平成23年3月18日発行  
松山市堀之内  
愛媛県美術館南館内  
TEL-FAX 089-932-0160  
メールアドレス  
youngvolheim07@yahoo.co.jp

## 高校生が今でできることを 東日本大震災に対するヤンボラの取組

平成23年3月、東北地方は東日本大震災による甚大な被害を受けた。ヤンボラでは「震災支援を考える」を23年度のテーマとしてボランティア活動に取り組んだ。

### 福音公園に応援メッセージパネルを制作

昨年3月26日、松山市福音公園にアートパネルと被災地へのメッセージパネルを設置した。福音公園は国道11号線小坂交差点高架下であり、光が遮られることから「楽しいけれど怖い」と子どもたちが感じているところである。この課題を解決するため、福音小学校や地域の方々、NPO法人えひめ子どもチャレンジ支援機構とともに企画・実践した活動が「福音公園づくりボランティア活動」である。

アートパネルは縦4m横3mの大きさで、県立松山西中等教育学校の美術部員がデザインし、福音小学校児童による手形六百個がタンポポや蝶の図案に使用されており、非常にカラフルで明るい作品に仕上がった。

アートパネルの完成直前に東日本大震災が発生



→福音公園に設置したアートパネル

した。小学生・高校生ともに、被災者を勇気づけたいという共通した思いがあり、急ぎよもう一枚パネルを制作した。手形によるハートを囲むように「日本の力をみせつけてやりましょう」や「どんな困難にも負けずに」といった小学生による手書きの被災地へのメッセージが綴られた。

公園に遊びに来た小学生は、完成したパネルの手形に自分の手を合わせると、完成したパネルの出来上がったパネルをうれしそうに見ていた。活動に参加した武智一晃さん(東温高2年)は、「アートパネルで公園の雰囲気明るくなったと思う。また、被災地へのメッセージパネルは、今も見るたびに、同じ国で震災にあった人がいるんだ、と改めて自覚させられる気がした。」と語った。



→併設した応援メッセージ

### 東日本大震災復興支援高校生講座

平成23年7月2日「被災地の実情を知りたい」という声がスタッフ会議で出たことから、宮城県へ派遣された松山東高等学校養護教諭の上田知子先生を講師に迎え、被災地の様子を学び、これから自分たちができることを考える高校生講座を開いた。



16名の高校生が参加

## 被災地からの修学旅行生と交流

### 笑顔の思い出作りをお手伝い

平成23年10月30日に被災地からの修学旅行生第二団として、岩手県立大槌高校の生徒が松山城を訪れた。ヤンボラでは、高校生スタッフがデザインしたクリアファイルに手書きのメッセージカードを添えて手渡しするとともに、「シャッターボランティア」や「甲冑着付けボランティア」を通して交流活動を行った。

東日本大震災の発生から半年が過ぎたころ、「えひめ愛顔(えがお)の助け合い基金」を活用した修学旅行生が来県するというニュースが飛び込んできた。全国で多くの人がボランティアに参加し、被災地の復興に力を尽くしている中、私たちヤンボラの高校生もできることをずっと探していたが、愛媛で活動できる機会が訪れたのだ。

た。先生が撮影された被災地の写真が映し出されると、被害の深刻さが伝わり、震災の現実や避難所となった学校の様子に言葉もなく引き込まれてしまった。



自分の意見を整理する参加者

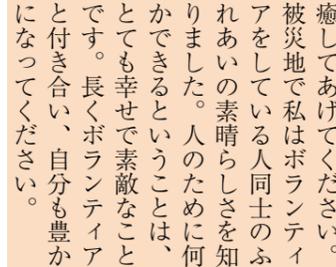
講演の後、4つのグループに分かれて意見交換をした。まず、各自でどんな感想や意見を書きこんでいき、その後グループ内の意見をまとめて、キーワードを出し合った。どのグループからも、高校生らしい意見が出された。多かったキーワードは「Thanks」「Smile」だった。何気ない日常への感謝の気持ちや、被災地の方に笑顔をとってもらいたい。講座に参加した高校生が抱いた共通の思いを何とかかたちにし、行動に移すことを確認して講座は終了した。



グループごとの意見交換の様子

### 講演をしていた上田知子先生の話

参加者のみなさんが関心を持って真剣に話を聞いてくれたので、心強く感じました。若いパワーがみなぎっているみなさんはそこにいるだけで周りに元気を与えることができます。いつか被災地と関わる機会があれば、何かしら小さなことで構いませんので、心の傷を癒してあげてください。被災地で私はボランティアをしていて人同士のふれあいの素晴らしさを知りました。人のために何かできるということは、とても幸せで素敵なことです。長くボランティアと付き合えば、自分も豊かになってください。



い思い出を残してもらいたい。私たちがすでに計画していた松山城での秋のシャッターボランティアとコラボさせることが決まった。さらに、ヤンボラスタッフのデザインしたオリジナルのクリアファイルと、手書きのメッセージ入りのおしおりカードを作ることも決まった。それから、130枚のカードを準備して当日を迎えた。



修学旅行生を迎えるスタッフ



→手渡したクリアファイル



甲冑の体験をする修学旅行生(中央)

植高校の生徒が来るのを待っていた。しばらくして広場に入ってきた生徒たちにファイルを手渡しとちよつと恥ずかしそうな顔をした。 「ありがとう」と言ってくれたり、微笑んでくれたり、いろいろな表情を見せてくれた。ボランティアに行ってきた方々がみな口をそろえて、「逆に元気をもらいました。」と言っていました。

これからもえひめの高校生はがんばるけん!

私たちがとって見慣れた松山城で、大槌高校の生徒のみなさんの写真を撮ったり、お互い笑い合っている姿を見て、今まで以上に松山城が素敵なものに見えた。今回のボランティアに参加したヤンボラスタッフ27名も同じように感じたのではないかと。

たった一枚のファイルですが、修学旅行の思い出の品として、また何かつらいことがあった時などに、たくさんの方が力になりたいと思っていることを思い出してほしいです。

### クリアファイルをデザイン 豊田真琴さんの話

デザインは、スタッフ会議で出たアイデアをもとに始めました。「愛媛らしいものに」「どこかにミカンを描こう」「坊っちゃんやマドンナを入れたら」など、喜んで使ってもらえるデザインにしたいと思い、手元の資料にとらめっこしながら描きました。線画に色が付いて、デザインが実際にファイルになったときはとてもうれしく思いました。当日手渡すのは緊張しましたが、みんな笑顔で受け取ってくれたのでよかったです。

